大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ぷらっとシネマ　実は甘くないアメリカ深南部の愛『チョコレート』（2002年）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15452

実は甘くないアメリカ深南部の愛——『チョコレート』(2002年)

萩原弘子

アメリカ深南部の刑務所でひとりの黒人男性の死刑執行が近い。妻子が最後の面会に来る。妻レティシア（ハリ・ベリー）は、これまでにさせられた苦労にうちのめされており、死を前にした夫にもやさしくなれない。今生の別れも白々しい雰囲気だ。刑の執行を担当するハンク（ビリー・ボブ・ソーントン）は、勤めの帰りに立ち寄る安食堂のウェイトレスが死刑囚の妻であることは知らない。

ハンクは、自分の地所を黒人が通りぬけるのも好まない人種主義者だ。同じ死刑担当官だった父も、人種偏見を堂々と表明する人物である。ハンクの息子ソニーは、そうした父たちに反感を抱いている。或る日、親子喧嘩の激しさが極まって、絶望の淵に追いつめられたソニーは突然自死してしまう。

刑吏を辞職する決意をしたハンクは、雨の夜、血だらけの息子を抱えて助けを求めるレティシアに行き会う。交通事故に遭った息子は、その夜病院で亡くなってしまう。どちらも息子を亡くし、愛にも人生にも絶望していた二人は急速に親密になっていく。ハンクは生活を変える。家賃滞納で住む場所も失ったレティシアを迎えるために、父を老人ホームに入れる。ガソリン・スタンドを買い、「レティシアの店」と看板を掲げ、つましくとも愛ある新しい人生に希望を感じている。

スイス人監督マーク・フォースターによるこの作品は、いくつもの点で深南部の現実から遠い。第1に、黒人憎悪を正義として生きてきた南部の男が、反人種主義を志向していた息子の死をきっかけに、翌朝から人種主義を捨てることなど、ありえない。1865年までの奴隷制、1964年までの人種隔離を支えた人種観は、奴隷所有層でなかった南部下層白人にとっても血肉となっている。たとえハンクがそのまちがいに気づいたところで、自分のなかの人種観を克服する過程は、つらく、また時間のかかるものであるはずだ。

第2に、レティシアが孤独で、家族にも黒人教会の仲間にも囲まれていないのは、南部黒人社会が家族的結束で支えあってきた歴史を考えると奇妙だ。たしかに、夫と息子を亡くし、家賃が払えなくなったレティシアが頼れるのはハンクだけということでないと、二人の関係は深まらない。しかし現実に南部で黒人女性がこういう状況になれば、まず助けの手をさしのべるのは黒人社会だろう。

第3に、話題になったセックス場面だが、いったい事故で息子を亡くした女が、その夜、ほとんど知らない男に、自分からのしかかるようにして性を求めることなどあるだろうか。またハンクにしても、頑固な人種主義者だった彼が女とは対等な関係をもってきたとは考えにくい。それがレティシアには乱暴なことをせず、彼女の性的望みを叶えようと徹底してやさしいのはいかにも奇妙だ。男がこうなるには、かなりの教育が必要である。

結局レティシアは、「黒人女性といえば性的存在」というおなじみの黒人女性像であり、白人との関係のなかにしか存在しない点で伝統的な黒人イメージである。人種主義は、反人種主義の息子に自殺されて黒人女性と寝れば克服できるようなものではない。しかしこの映画にも、かすかな現実味くらいはある。それを日本の配給会社は、ひどい邦題をつけることで、わからなくしてしまった。邦題『チョコレート』は、レティシアの人種と、二人で食べるチョコ・アイスクリームからつけられたのだろう。原題はMonster's Ball、つまり『怪物の宴』。刑執行前夜に死刑囚に出されるちょっと豪華な最後の食事、それが「怪物の宴」である。永遠の終幕、決定的な破綻の前の宴。宴が終われば、あとは破滅の闇が待つだけだ。ハンクの家で暮らしはじめたレティシアが、彼の引きだしのなかに一枚の肖像画を見つけてしまう。絵が得意だった夫がハンクを描いたものだ。レティシアは、夫の刑執行担当者がハンクであったことをはじめて知る。苦労させられただけの夫だが、その死刑を担当した男との関係に未来があるわけはない。このあとに来る破局がもたらす絶望の暗さを思わせて、映画は終わる。二人の関係は、破滅の前夜に催される死臭ただよう不気味な「怪物の宴」だ。物語はこのタイトルに向けて進行している。『チョコレート』としたのでは、その不気味さは伝わらない。日本の観客を愚弄する配給のしかただ。これは、傷ついた二人が人種を越えて愛で癒されていく物語ではなく、その不可能性を説く絶望の物語である。